

第七回 総合研究機構研究成果報告会

アジア太平洋地域の過去・現在・未来： ニュージーランドと日本

*司会：

本日はお忙しいところを、本シンポジウムにご来場いただきましてありがとうございます。主催者より開会に当たりましてお願い申し上げます。携帯電話、PHSの電源は必ずお切りいただくか、マナーモードに設定の上、通話をご遠慮ください。また、本日は会場外にコーヒブレイクのコーナーを設けております。会場内、ホール内の持ち込みはできませんので、あらかじめご了承ください。また、資料内に質問用のカードが入っております。お時間のいい時にご記入の上、ホールの質問回収箱にお入れください。すべてのご質問にお答えできるとは限りませんので、あらかじめご了承ください。

本日、総合司会を務めていただきます原田先生、よろしく願いいたします。

*総合司会（原田）：

皆さんこんにちは。ただいまから「アジア太平洋地域の過去・現在・未来：ニュージーランドと日本」というテーマで、早稲田大学総合研究機構成果報告会を開催いたします。よろしく願いいたします。

〔開会の辞〕

森 原 隆

(早稲田大学総合研究機構長／早稲田大学文学学術院教授)

*総合司会：

それでは最初に開会の辞。早稲田大学総合研究機構長森原隆先生。

皆さんこんにちは。今紹介にあずかりました総合研究機構の機構長を務めております文学学術院の森原と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日はお忙しい中を多数の方々にご参加いただきまして誠にありがとうございます。シンポジウムの主催者として一言ご挨拶をさせていただきます。

早稲田大学総合研究機構プロジェクト研究所は、ことしで設立12周年を迎えまして、本年もまたこのようなシンポジウムを開催する運びとなりまして、関係各位の方々には厚く御礼を申し上げたいと思います。本日はまた駐日ニュージーランド大使のイアン・ケネディ氏におかれましては、多忙なご公務の中をおいでいただきまして誠にありがとうございます。また、学内からは早稲田大学理事の深澤良彰先生にもお忙しい中をかけつけていただきまして厚く御礼を申し上げます。

ところで、早稲田大学の総合研究機構というのはどういう研究機構ですか、あるいはプロジェクト研究

所というのは一体何ですかというようなことをよく聞かれます。特に学外の方にはわかりにくい研究組織であると思います。通常、研究所といいますと何か大きな建物ですとか、永続的な研究員の組織を思い浮かべてしまいますが、プロジェクト研究所と申しますのは、そのようなものではありませんで、一定の期間内に所定の研究プロジェクトを実施するために設置される時限的・機能的な研究所でございます。少なくとも4名以上の専任の教員が中心となって共同研究を行うものでありまして、総合研究機構は現在そのようなプロジェクト研究所を理系と文系合わせて120ほど総合的に束ねる組織となっております。

総合研究機構は特にこのプロジェクト研究所を学内外で代表する組織でありまして、研究所の設置や運営に関する業務、人事、経理、庶務全般を担当しており、広報活動も行っております。本日の成果報告会、シンポジウムもそうした広報活動の一環でございます。

さて、本日のシンポジウムのテーマは、「アジア太平洋地域の過去・現在・未来：ニュージーランドと日本」というテーマでございます。ご承知のように、本年、ニュージーランドと日本は奇しくも相次いで大地震に見舞われ、危機に直面をいたしました。今回の国際シンポジウムでは、この両国の復興を祈りながら、両国の関係を再検討していくということを目指しております。

私事で恐縮ですが、私自身は西洋史学という学問を専門にする研究者でありまして、広い意味でニュージーランド史研究もその西洋史学の枠内に入ります。しかし、日本におけるニュージーランド史専門の歴史研究者は実際のところ非常に少なく、高校の世界史というような教科でも、ニュージーランドについては18世紀後半の有名なクックの太平洋探検によってイギリスの植民地となり、原住民のマオリ族の抵抗が武力で抑え込まれたことや、1907年に自治領になったことが教えられる、その程度です。この点で本日の日本におけるニュージーランド研究のご報告は大変貴重なものであると存じます。

また、地震ということ言えば、ヨーロッパ史では1755年にポルトガルのリスボンで大地震が発生いたしましたして、ヨーロッパ中を震撼させました。マグニチュードは8.5から9ぐらいというふうに推測されまして、15メートルを超える津波がリスボン市街地を2度飲み込んだようでして、津波による死者は1万人を超えまして、全体の死者は6万人から9万人と推定されています。この18世紀半ばの時代のヨーロッパは比較的経済の好況期でありまして、啓蒙思想という進歩史観的な考え方の全盛期でもあったのですが、リスボンの大地震はこのような神の摂理や楽天的な見方に浸っていた当時のヨーロッパの人々に痛烈な警鐘となり、ここからヨーロッパの近代的な思考やシステムが再出発したという、そういう見方もあります。建物の8割を破壊され、大航海時代以来の文化的遺産の多くを失ったポルトガルもここから復興していきまして、地震学という学問研究もこの地震から生まれていったとも言われています。この意味でも、地震を経験したニュージーランドと日本がこれからどう復興していくのか、本日のシンポジウムは極めて重要なテーマを扱っているように思われます。

本日のシンポジウムの開催にあたりましては、早稲田大学ニュージーランド研究所、早稲田大学オーストラリア研究所のご協力を得ておりまして、また学外では日本ニュージーランド学会のご後援を得ております。主催者として心から御礼を申し上げます。簡単ではございますが、これをもって挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

*総合司会：

森原先生、ありがとうございました。ただいま機構長の森原先生のお話のとおり、この会は早稲田大学総合研究機構の中の1つである早稲田大学ニュージーランド研究所の報告会でございます。ニュージーランドに興味をお持ちの方たくさんお集まりいただきまして本当にありがとうございます。遅れましたが、私はきょうの総合司会を担当いたします原田でございます。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

〔 挨拶 〕

深澤良彰

(早稲田大学理事／早稲田大学理工学術院教授)

*総合司会：

それでは続きまして早稲田大学理事の先生でいらっしゃいます深澤良彰先生からご挨拶をいただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

皆さんこんにちは。早稲田大学の研究推進担当の理事をさせていただきます深澤と申します。本日は、第7回の早稲田大学総合研究機構成果発表会においでいただきましてどうもありがとうございます。この半日が皆さんにとって有益な半日となることを祈っております。

私、最近悩みがあります。その悩みの1つは、今年の早稲田のラグビー部が弱いことです。それで、是非何とかして欲しいと思ひまして、今日は実はオールブラックスのネクタイをしてまいりました。世界一になったオールブラックスのパワーを是非早稲田にもいただければなと思っております。ちなみに、このネクタイは私の娘がオークランドにホームステイをしたとき、そのおみやげとして買ってきてくれたものです。

まず、先ほど森原先生のお話にありました総合研究機構、あるいはプロジェクト研究所が、基本的に何を目指しているのかという点をご説明させていただきたいと思ひます。研究を指向する大学では、通常、学部とか、大学院とかに沿った形で研究所というのがあります。でも、こういう「作り」の研究所は、どうしてもその学部・大学院に依存しがちです。今日のテーマであるニュージーランドと日本、これを考えてみても、早稲田大学の中には、例えばニュージーランドの政治に興味を持っている先生、経済に興味を持っている先生、歴史に興味を持っている先生、あるいはスポーツだとか文化だとか、そういうところに興味を持っている先生、いろいろな先生方がいろいろな学部にいらっしゃいます。そのような先生方に学部横断的にまともまもらせていただき、広くニュージーランドというテーマで研究をしていただくためには、学部横断的な研究の組織が必要となってきます。このために作られたのがプロジェクト研究所というカテゴリーの研究所でございます。本日は、広くニュージーランドに関する研究所の中で、ニュージーランド研究所と、そのお隣のオーストラリアを研究の対象としているオーストラリア研究所という2つの研究所の共催ということにさせていただきます。

このプロジェクト研究所、今、早稲田大学に200弱でございます。ここで話題となっているニュージーランド研究所だとかオーストラリア研究所という地域に依存した研究所もあれば、あるいは技術、例えばコンピューターのソフトウェアだとか、ハードウェアだとかに依存した研究所もあります。このようないろいろな学部横断的な研究所を作ることによって、比較的学部依存した附置研究所における研究、およびプロジェクト研究所を中心とした学部横断的な研究、この2つの縦横の網をうまく張りめぐらしていくことによって早稲田の研究を進めていきたいと考えております。こういう意味で、今日、ニュージーランドと日本に関する多くのお話が聞ければいいなと思っております。皆さん、いろいろな質問をするチャンスもありますので積極的に議論に参加して、良い半日としていただければと思ひます。本日は、皆さんおいでいただきましてありがとうございました。(拍手)

*総合司会：

深澤先生、ありがとうございました。